

## 畏友 宮原宣君の死を惜しむ

中 野 三 郎\*



去る9月15日(金)、「敬老の日」の朝、電話。受話器をとって、宮原夫人の声を耳にした瞬間、不吉な予感に襲われた。電話の用件は、矢張り夫君の死去を知らせることであつた。しばらくしてまた電話。それは、日大文理学部数学教室の実宝四郎教授からの、宮原宣教授の死の知らせであつ

た。同日夜お通夜、翌日午後葬儀、告別式という式次第を承わつたので、直ちに関係各方面に電話で連絡をした。翌9月16日(土)の朝日新聞には、次のような記事が載っていた。

宮原 宣氏(日本大学文理学部教授)15日午前0時25分、脳動脈硬化症のため、東京・日大駿河台病院で死去。68歳。告別式は16日午後1時半。千葉県柏市緑ヶ丘21の2の自宅で。喪主は長男裕氏。

私は10月14日(土)宮原家を再度お訪ねし、御遺骨の前に頭を垂れ、しばし黙禱、静かにお焼香をすることが出来た。

真新しい御位牌には、徳数院禪嶽宣導居士の戒名が記されていた。その後、奥様の恒氏からいろいろとお話を承わることが出来た。長女の恭子氏は大阪の宮地家へ嫁がれ、次女の郁子氏はお母様のお手伝いをして居られ、長男裕氏は第一生命本社に御勤務の由。

宮原宣君は学生の頃から歩くことが大好きで、バスや電車が通っている大道でも、悠々と散歩のような調子で歩かれた。健康、特に健脚を誇っても居られた。ところが3年程前に、医者から血圧が高いといわれ、以来、時折り診断を受けるなど、健康に気を使われるようになった。今年になっては、さらに精密検査を受けるため、2月中頃から末まで日大駿河台病院に入院。その後は、医者の指示に従い体をいたわりながらも、従来通り学生の指導並びに研究に専念されて居られたが、8月になつ

て、脚の腫みが気にかかるようになった。8月17日再び同病院を訪れ、診察、検査の結果は、翌18日直ちに入院という事態に立ち到つた。そうして9月15日が到来したのだ。肝硬変もあり、肺炎の併発もあった由である。

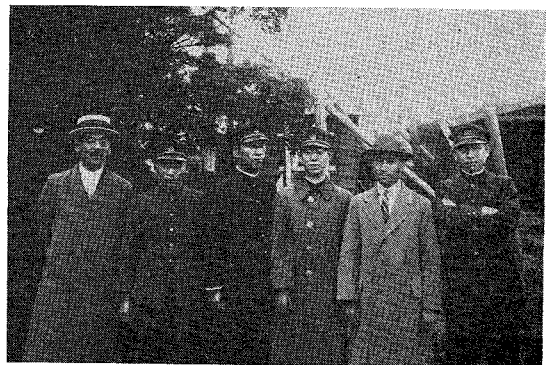
日の経つのは矢張り速いものである。「文化の日」の前日、11月2日が四十九日に当るのだが、繰り上げて、10月29日(日)に法事と埋骨をするというお話を伺っていた。今、宮原宣君の御霊は、静かに「鎌倉靈園」に眠って居られるのだ。

宮原君の生れは明治37年2月2日、本籍地は岡山県真庭郡落合町中河内2116。学歴は次のようであつて、今の言葉でいえば、「選良な人生路」を順調に進み出されたのであつた。

大正10年3月	東京府立第四中学校第四学年修了
大正13年3月	第一高等学校理科甲類 卒業
昭和2年3月	東京帝国大学理学部天文学科卒業
昭和4年4月	東京帝国大学大学院第2学年修了
昭和36年11月10日	理学博士(東京大学)

私は宮原君と共に天文学科で学んだ同期生の1人である。

この同期生一同の写真は大正14年(1925)6月、麻布の天文学教室で撮つたものである。左から右へ、香川松太郎、宮原宣、蓮沼左千男、中野三郎、小室(旧、金田)鉦、白石通義の諸君である。香川氏は陸地測量部からの、小室氏は東京商船学校からの聴講生であつた。今では、小室氏と私とが生き残りとなつてしまい、不適格な



\* 東京理科大学

ことを知りながらも本誌の編集子に乞われるままに私が筆をとってしまったのは、懐旧の念に駆られたことと、「私の長友宮原君」という気持ちのためで、何が書かせて欲しいという、むしろ身勝手なお願いであったのかもしれない。

天文学科学生としての宮原君は、天体力学の他は、数学科の課目に、より多くの興味を持って居られた。宮原君の一生を通じての親友には数学科の学生であった荒又秀夫、毛利集雄両君が居た。宮原君は、実験のようなことには興味少なく、選択科目であった「緯度観測」をやらなかった同君は異色であった。また一高時代の話かも知れないが、2人組んでの物理実験では、宮原・荒又組は特異な存在であったという。2年の必修科目には「軌道論」があった。その講義は御帰朝後間もない萩原先生から伺ったのであった。また Jeans の“Problems of Cosmogony and Stellar Dynamics”を先生の御指導で読んだこともあった。私共の組は先生の第1番目の弟子であり、宮原君は、ほんとの1番弟子でもあったわけだ。恩義に篤い宮原君は、折りにふれては、(麻布後に本郷)の天文学教室に先生を訪れ、永い間の(結果においては一生を通じて)先生から受けた、温かいまた厳しい御指導に対し、心からの感謝を披歴していたようであった。

また宮原君は、余計な言葉、無駄な言葉、くだらぬ言葉をいわないから、寡黙の人といてよいだろう。併しその口から飛び出る言葉は聞く人の胸に直接に鋭く伝わるものが多かった。お世辞や、いい加減な言葉、筋の通らぬ話、インチキな説明は大嫌いであり、はっきり軽蔑、黙殺の態度を示されたものだ。また「頭のよい子は好き」、「頭の悪い子は嫌い」と、はっきりしていた。これらの特徴の中のあるものは年をとるにつれ次第に顕著になったが、このようなことは、誰にでもあることだ。宮原君の「マリヤ様」という、頭の大変によい女子職員の話も聞いたことがある。宮原君の本の読みかたにも大変に特徴があった。よい本を見つけたらその一冊を、繰り返し繰り返し完全に納得理解するまで読みつづけるという方法で、しまいにはその本の全部が宮原君の頭に納められてしまうわけなのだ。随分長い間、いつ宮原君を訪ねても、机の上に同じ本が置いてあった。読みかけらしく開かれたままのときも、あるいは一応終わったとして隅に置かれていたときもあったが、例えば Cartan の“Leçons sur les Invariants Intégraux”はそうであった。このことは、この度、奥様から「主人の本は、きたなく、よごれたものばかりで…」というお話と矛盾しない。私はひそかに溜息をついたのであった。

天文学科卒業後は大学院にて研究を進められたと共

に、文部省測地学委員会の囑託として潮汐の計算を手伝われた。昭和8年から20年(終戦の年)10月までは海軍省水路部に勤務、その後昭和22年5月から1年程の間は海洋事務を囑託されて長崎海洋気象台に勤務。昭和23年から昭和39年3月の停年まで水路部(運輸省水路部、後に、海上保安庁水路部となる)に勤務された。この間海象課長、編暦課長、海洋研究室長、水路部参事官として、大いに腕を振われ、また天体力学への研究意欲は高まる一方であった(論文目録参照)。そして、一等海上保安監として水路部を退職されたのである。

昭和39年4月、日大文理学部教授として応用数学(主として微分方程式)の講義を始められた。日大における宮原君の活躍の一端は、柏市の御自宅から世田ヶ谷・桜上水の学校までの途中に私の勤務している学校があるので、時々立ち寄られては、昔からの、正義感に燃えた、硬骨振りを発揮しながら、学校での教育や研究のあり方についての話をされた。今年の4月26日(水)には私の部屋から数学の本1冊を借りて行かれて、神楽坂の鰻やで、夕食を共にした。5月17日(水)にはまた私の部屋に来られた。主な目的は約束通りに、本を返すことにあったようだった。私が部屋に戻ったのは少しおそかったが、いつもなら少しは待っていてくれるはずの宮原君なのにこの時は部屋の女子職員に本を託して、すぐに帰えられた。部屋に戻って会えなかった私は大変に残念であった。何でそんなに急がねばならないのかとも思った。本はたしかに受け取ったという連絡はしなかったように記憶している。これが宮原君との最後の触れ合いになってしまったわけだ。

「図書の貸し借りについて、宮原先生は大変にきびしい方だ」ということをあとから実宝教授から伺った。宮原君は無理をして、私の部屋まで返しに来てくれたのではなかったか。

日大での宮原君についてはお葬式の際、日大文理学部長の菊地栄一教授が読まれた弔詞の一節を引用させていただく。『……今日の世相にもかかわらず毅然とした態度をもって学生を指導されました。そして学問の研究指導については、実に親切でありました。……最近「学生に基礎学力をつけるのが大切である」ことを反復強調される先生でした。これが数学研究室の大きな課題となって参りました……』

毎月1回か2回ずつ行なわれている天文学教室談話会、東京天文談話会や、春秋2回の日本天文学会の年会には、度々出席され、御自分の研究の発表の他、同僚・後輩の話にも熱心に耳を傾け、独特のきびしさで、それらの人々に有益な示唆を与えて居られた。

学術研究会議地理学研究委員会委員、日本海洋学会会員、日本天文学会評議員、測地学審議会委員、日本測地

学会委員兼幹事等としても活動された。また、宮原君は生前の功績により、正四位に叙せられ、勲四等旭日小綬章を授与された。

生き残りの同期生として心から同君の御冥福を祈ります。同君の立派な、むづかしい研究業績については、何も述べなかつた。それには私は不適格者であったから。また宮原君はそのことを喜んでることと思います。

#### 主要論文目録

A Study of the Theory of Tides (J.J.A.G. Vol. 10, No. 1) 1932

Extension of the Method of Hamilton and Jacobi (J. J.A.G. Vol. 21, No. 3) 1947

On the Relation between Infinitesimal Transformation and Integral (J.J.A.G. Vol. 21, No. 3.) 1947

Determination of the Normal Coordinates by the Contact Transformation (P.A.S.J. Vol. 1, No. 3) 1950

On the Non-contact Canonical Transformation (P. A. S.J. Vol. 6, No. 1) 1954

On the Problem of Three Bodies (P.A.S.J. Vol. 6, No. 1) 1954

On the Existence of the Normal Form in the Neighbourhood of an Equilibrium Point of Analytical Hamiltonian Differential Equations (P.A.S.J. Vol. 14, No. 3) 1962

On the Isoclines Trapezoidal in the Problem of Four Bodies (誌名, 年代未詳)

### 新刊紹介

#### 地球電磁気学

力武常次 著

(岩波書店, A5判, 472頁, 2,700円)

天文学を研究して行くと、研究対象が段々天文学以外の分野にも関連を持って来てしまつて、未知の分野の「そが知りたい」というせっぱつまった要求が生じることがある。このような時にその分野に良いテキストがあるかないかによって、調査に要する労力と時間に格段の差ができてしまう。このような意味で、この「地球電磁気学」の出版は、極運動や地球自転変動を研究する者にとって、大変都合なことであった。実際、チャンドラー周期の説明や黄道傾斜角の永年変化などを考える上で、コアとマンツルの磁気相互作用を知る必要がある。また、極の永年変化—大陸移動—古地磁気、自転速度変動—磁場変化など。

ところで地球電磁気学の取り扱う内容は、主に地磁気であるが、これに関するテキストは“Geomagnetism”の名で1940年に出されたものがある。しかしその後、国際地球観測年などを経てこの部門は著しい進展を見せており、(1)太陽活動と磁気変化—それに対する地球物質の反応—地球内部電気伝導度—内部の温度分布—CA(地下の局所的電気伝導度異常)のような系統の他に、(2)岩石磁気学—古地磁気—大陸移動—マンツル対流—プレートテクトニクス、(3)地球表面の磁場分布—その永年変化—地磁気原因論—惑星の磁場と内部構造、などの重要な仕事が続々と行なわれている。本書はこのような各種のテーマについて、膨大かつ最新の文献を引用して広く解説しており、地磁気入門書として30年あまりの空白をよく満たしている。文献は1971年の一部まで含ま

れている。

しかしこの本は、単なる一般解説書ではなくて、著者の主な仕事である上記(1)について、電磁感応理論を中心に磁気測量やCAなどの現場最前線までも含めて、くわしく解説することに主眼を置いている。そこでは電磁気学の方程式を縦横に駆使して各種の物体の電磁感応を論じた後、地球内部の電気伝導度、ひいては温度を決めるための見事な応用を展開しており、内容が濃く大いに勉強させられる。またCAの研究は内部を探る上でも重要であり、まさに最先端の問題であるので、読んでいて尽きない興味をそそられる。そしてこれらを観測面から支える磁気測量およびその測定器類の話、地磁気永年変化、残留磁気の測定の話というように詳述されているが、これらの分野の全てにおいて著者を中心とする日本の研究グループの果たした役割が大きいという事実は、そのままこの本が、和文で書かれていても世界第一流の教科書であるということを示している。他に岩石磁気学やプレートテクトニクスなども重要であるが、詳しいことは別書にゆずるとなっている。ただし地磁気原因論については各種の理論を引用してくわしく解説してあり、惑星の磁気まで含めて最新の成果を学ぶことができる。

天文学の立場から、地球電磁気学の現状を入門的に探ろうと思って読み始めた読者は、手引き書としての要求を満たしてもらった上に見事な理論の展開に接して大いに視野を広げることになる。入門者には大いに勉強させ、研究者にはその研究意欲に刺激を与えてくれる本であると思う。(中嶋浩一)

#### Physical Cosmology

P. J. E. Peebles 編

(Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1971. 282頁, \$ 9.00)

ガモフの「熱い宇宙」仮説と、2.7°K 宇宙輻射の発見